

キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果

飯田 稔・関根 章文*

The effect of camp experience upon the general self-efficacy of school children

Minoru IIDA and Akifumi SEKINE

The purpose of this study was to examine the effect of camp experience upon the general self-efficacy of 5th and 6th school graders (N=48), who participated in a 7-day camp conducted in 1990.

To measure the individual's strength of general self-efficacy across a variety of settings in everyday life, the General Self-Efficacy Scale for Children (GSESC), which was modified from the General Self-Efficacy Scale (GSES), was administered three times: one month before, immediately after, and one month after the camp.

The following results were obtained:

1. The General Self-Efficacy Scale for Children (GSESC) had high reliability and well enough potential for the research application to children.
2. The participants in camp improved in the general self-efficacy, particularly in the category of "Anxiety about Failures", one month after camp with comparison to the non-participants.
3. The participants who had former camp experience at the same camp showed higher general self-efficacy than whom had not.
4. The fifth grade boys who had not former camp experience improved in the category of "Behavioral Activeness" in relation to grade level, gender, and former camp experience.

Key words: Camp, General self-efficacy, School children, Effect

目 的

キャンプは人間、自然、プログラムの三つの要素が相互に作用し合いながら行われる総合的活動であり、多くの貴重な教育効果が期待されている。

Swan²¹⁾は、キャンプに代表される野外教育の一般的目的として、1) 社会性の育成、2) 自己概念または自己認識の向上、3) 教科の拡充、4) 環境の認知と理解、の4つの領域をあげている。キャンプと環境教育に関する研究成果をレビューした van der Smissen²³⁾は、野外体験が参加者に

及ぼす効果を、1) 環境に対する行動と理解、2) 社会的相互作用、3) 自己の発達、の3つに大別している。このように、自己意識の向上や自己の発達は、キャンプの目的の一つであり、キャンプの効果の評価研究における主要な従属変数となっている。

1970年以降、野外教育やキャンプの分野で野外での冒険教育 (Outdoor Adventure Education) プログラムが開発され、新しい動向として注目されている。冒険教育プログラムが参加者に及ぼす効果に関する研究は、自己理論の枠組み (A Framework of Self-Theory) の中で展開されていて、

* 筑波大学体育研究科研究生

Self-Concept, Self-Actualization, Self-Esteem, Self-Enhancement, Locus of Controlなどが従属変数として採用されている^{3,5,13,19}。わが国では、冒険キャンプが参加者の自己概念に及ぼす影響に関する研究として、Iida et al.⁶、飯田ら^{7,8}、井村⁹、岩田¹⁰、影山・飯田¹¹、影山¹²、橘ら²²の報告がある。

1980年代になって、Bandura¹¹が提唱した自己効力の理論を取り入れた研究がアメリカの野外教育の分野で発表されている^{2,4,15,24}。自己効力とは、適切な行動をうまくできるかどうかという個人的な確信で、自己効力を高く認知している個人は、積極的に課題に取り組み、葛藤的な状況に長期的に耐えることができるという行動特徴を前提にしている。したがって、自己効力を個人がどの程度身につけているかを認知することが、その個人の行動を予測する要因となると解釈されている。

野外教育に関して自己効力を扱った研究例として、Harmon and Templin⁴は、Outward Bound Schoolのプログラムの妥当性を自己効力の4つの情報源、即ち1) 遂行行動の達成、2) 代理的経験、3) 言語的説得、4) 情動的喚起との関係から理論的に説明している。

Sachs¹⁵はHarmon and Templinの理論にもとづいて、Jessor Expectancy Questionnaire (JEQ)を用いて、12~18歳の問題行動児8人を対象に3日間のWilderness Camping Programを行ったが、自己効力の効果はみられなかった。

36人の非行少年とその対照群を対象に、Wright²⁴はGeneralized Expectancy for Success Scale (GESS)を使って、26日間のOutward Boundタイプの冒険プログラムを実施し、一般性自己効力が向上したことを報告している。

Brody, Hatfield and Spalding²は、懸垂下降(Rappelling)を用いた実験プログラムに参加した大学生は、対照群に比べ自己効力が向上し、スキューバダイビングやロッククライミングのようにストレスが強く、高度に危険な他の野外活動の自己効力にも般化がみられたが、日常生活の自己効力への般化は部分的で、弱いものだったと報告している。

わが国の自己効力に関する研究は、主として行動療法研究者による臨床的あるいは実験臨床的な研究報告が多くなされているが¹⁷、キャンプを扱った研究は現在までのところ報告されていない。

坂野・東條¹⁶、坂野¹⁸は自己効力を高くあるいは低く認知する傾向は、いわば人格特性のように人の行動を規定するものであるという前提から、個人が日常生活の中で示す一般的な自己効力の強さを測定する「一般性セルフ・エフィカシー尺度」を成人を対象に作成している。しかしながら、児童を対象にした一般性自己効力の測定は今日まで試みられていない。キャンプ経験によってその後の日常生活の中で、どの程度一般性自己効力に変化を生じるかを検証してみることは有益であると思われる。

本研究では、キャンプに参加した小学校高学年児童を対象に、次の3つの研究課題を設定した。

- 1) 坂野・東條¹⁶の尺度にもとづいて、児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度を作成し、児童への適用性を検討する。
- 2) キャンプ経験が参加児童の一般性自己効力に及ぼす効果を検証する。
- 3) 一般性自己効力の変化と、参加児童の学年差、性差、キャンプ経験との関係を明らかにする。

方 法

1. 被 験 者

1990年8月に幼少年キャンプ研究会が主催したキャンプの参加者、小学校5・6年生48名を実験群(キャンパー)とした。また対照群はキャンパーの友人42名(非参加者)で、キャンパーと同一の学校、学年、性別により抽出した。学年、性別の内訳は表1の通りである。なお、同研究会主催のキャンプに以前に参加したことのある経験者は、48人中33人(68.7%)で、これをキャンプ経験者とした。

2. キャンプの概要

キャンプは6泊7日の日程で、宮城県栗原郡花山村にある同研究会所有の花山キャンプ場で実施された。キャンプ生活は、テントで寝袋を使用し

表1 被験者内訳

	実 験 群			対 照 群		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計
5年	23	6	29	20	6	26
6年	9	10	19	9	7	16
合計	32	16	48	29	13	42

て宿泊し、自炊による原始的キャンプの形式で行われた。大学教官、医師、大学院生を含む14名のスタッフがキャンプの指導と運営にあたった。

キャンパーは一班6もしくは7名からなる男女学年混合の7つのテントグループで編成され、各テントグループにカウンセラーが1名ずつ配置された。

キャンプでの主要な活動は、テントサイトの設営・撤収、仲間づくりゲーム (ASE)、沢登りとテント泊を含む1泊2日の登山、個人別自由活動、クラフト、キャンプファイヤーで構成されている。キャンプの日程を表2に示した。

3. 検査および手続き

坂野・東條¹⁰⁾が成人用に開発した16項目2件法の一般性セルフ・エフィカシー尺度 (General Self-Efficacy Scale) をもとに修正し、「児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度 (General Self-Efficacy Scale for Children, 以下 GSESC と略記する)」を作成した。質問項目の表現を小学校高学年児童が理解できるよう平易な文章にし、「Yes」「No」の2件法による回答を、「とてもそう思う」から「まったく思わない」の5件法に修正した。したがって、得点は最高80点、最低16点の範囲にあり、得点が高いほど一般性自己効力感を強く認知している傾向を示す。

GSESC の調査は、キャンパーにはキャンプ1ヶ月前 (Pre)、直後 (Post 1)、そしてキャンプ1ヶ月後 (Post 2) の3回、非参加者にはキャンプ1ヶ月前と1ヶ月後の2回、郵送調査法によって実施された。ただし、キャンプ直後 (Post 1) については、キャンプ場での集合調査法で行った。

4. 統計処理

児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度の検討にあたっては、信頼性をみるために相関係数を求め、項目について因子分析を行い、キャンプによる一般性自己効力への効果については実験群と対照群の変化の比較に t 検定を用い、一般性自己効力と諸変数との関係についても t 検定により統計処理を行った。

結 果

1. 児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度の検討 児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSESC)

の信頼性を検討するために、小学校5・6年生75名を対象に、キャンプ前の6月・7月の2回行った予備調査の結果、第1回時平均は46.57、標準偏差9.73で、第2回時平均は46.85、標準偏差は9.10であった。1ヶ月のインターバルによる検査・再検査間相関分析の結果、相関係数は非常に高いものであった。 $(r = .83, p < .001)$ 。8項目からなる部分テストに分割し、スピアマン・ブラウンの公式にしたがって信頼度係数を算出した結果、 $r = .77$ という高い値であった。またクーダー・リチャードソンの第20公式にしたがって算出した信頼度係数は $r = .80$ であった。したがって、再検査法、折半法、内部一致性による信頼性の検討から、児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度は高い信頼性を持っていることが明らかにされた。

次に予備調査の小学生75名とキャンパー48名、非参加者42名計165名の各々第1回目のデータを対象として、主成分分析、バリマックス回転を用いて因子分析を行った。その結果、得点の分布 (得点可能範囲80~16点) は、平均値49.09、標準偏差9.51であり、最大値、最小値は各々76、24であった。固有値1.00以上を基準に4因子 (第1因子5項目、第2因子6項目、第3因子4項目、第4因子1項目) に分かれ、因子負荷量はすべて.500以上であった。その結果を表3に示した。この結果は、第1因子と第2因子の逆転と、2因子中に各々1項目ずつの移動がみられたこと、そして第4因子として1項目あった以外は、坂野・東條¹⁰⁾の結果と一致していた。項目の移動は、項目5「人とくらべるとよく心配するほうだと思いますか」が第2因子から第1因子へ、また項目11「どうやったらよいか決心ができなくて、ものごとにとりかかれないうほうだと思いますか」が第2因子から第1因子に移動していた。これら2項目は、いずれも移動後の因子によりふさわしい内容であると考えられることからそのまま採用した。第4因子は項目6「何かを決めるとき、迷わずに決めるほうだと思いますか」で、成人用では「行動の積極性」因子に属していたが、1項目だけだったので削除した。したがって、児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度は15項目 (得点可能範囲75~15点) からなり、因子名は坂野・東條に準じ、「失敗に対する不安」「行動の積極性」「能力の社会的位置づけ」とした。

表3 各因子を特徴づける項目群

因子	項目No.	項目内容	因子負荷量
失敗に対する不安	14	小さなしっばいでも人よりずっと気にするほうだと思いますか。	.76858
	2	前のしっばいやいやなことを思いだして暗い気持ちになるほうだと思いますか。	.75390
	5	人とくらべるとよく心配するほうだと思いますか。	.74212
	4	ものごとを行った後、しっばいしたと感ずることが多いと思いますか。	.66712
	7	何かをするときうまくゆかないのではないかと心配になるほうだと思いますか。	.61235
行動の積極性	15	自分から進んでかかどうするのは苦手なほうだと思いますか。	-.76192
	13	どんなことでも自分から進んでこなすほうだと思いますか。	.74585
	10	結果がどうなるかわからなくても自分から進んで取り組んでゆくほうだと思いますか。	.72769
	11	どうやったらよいか決心ができなくて、ものごとにとりかかれないうほうだと思いますか。	-.55917
	1	何かをするときには自信を持ってやるほうだと思いますか。	.54915
	8	ひっこみじあんなほうだと思いますか。	-.53232
能力の社会的位置づけ	3	友だちよりもすぐれた能力があるほうだと思いますか。	.79071
	16	世の中の役に立てる人だと思いますか。	.75639
	12	友だちよりもよく知っていることがあると思いますか。	.72158
	9	人よりも、ものおぼえがよいほうだと思いますか。	.71025
	6	何かを決めるとき、迷わずに決めるほうだと思いますか。	.84319

2. キャンプ経験による一般性自己効力への効果
 まず初めに、一般性自己効力の変化の推移を実験群のキャンパーについてみるために、Pre, Post 1, Post 2 の GSESC 得点の平均を t 検定で比較した。その結果、表 4 に示すように、Pre を基準にした Post 1 と Post 2 には有意差 (Pre vs Post 1 : $t=4.27, df=47, p<.001$, Pre vs Post 2 : $t=5.33, df=47, p<.001$) がみられたが、Post 1 vs Post 2 には有意差はみられなかった。因子別得点では、Pre vs Post 1 で「失敗に対する不安」と「行動の積極性」の両因子に有意差 (各々, $t=3.88,$

$df=47, p<.001, t=2.72, df=47, p<.01$) が認められたが、「能力の社会的位置づけ」因子には有意差はみられなかった。また Pre vs Post 2 では 3 つのすべての因子 (「失敗に対する不安」 : $t=4.64, df=47, p<.001$, 「行動の積極性」 : $t=2.34, df=47, p<.05$, 「能力の社会的位置づけ」 : $t=2.08, df=47, p<.05$) で有意差が認められた。

したがって、キャンプ直後に一般性自己効力の向上がみられ、その効果は 1 ヶ月後まで持続しており、この変化はごく一部を除いて、すべての因子に共通している。

表4 実験群と対照群の GSESC 得点の比較

因子	群	Pre		Post 1		Post 2		t1	t2
		M	SD	M	SD	M	SD		
GSESC	実験群	48.06	9.65	52.44	10.79	52.19	9.90	4.27***	5.33***
	対照群	47.67	8.65	—	—	47.95	7.54		
		$t=.20$				$t=2.26^*$			
失敗に対する不安	実験群	14.71	4.87	17.08	5.05	16.98	4.53	3.88***	4.64***
	対照群	15.74	4.45	—	—	15.03	4.24		
		$t=1.04$				$t=2.11^*$			
行動の積極性	実験群	20.58	4.74	22.06	4.80	21.58	4.22	2.72**	2.34*
	対照群	19.98	4.21	—	—	20.50	3.89		
		$t=.64$				$t=1.26$			
能力の社会的位置づけ	実験群	12.77	3.20	13.29	3.43	13.63	3.39	1.13	2.08*
	対照群	11.95	3.35	—	—	12.43	2.92		
		$t=1.18$				$t=1.78^+$			

t1=Pre vs Post 1 t2=Pre vs Post 2 + $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

次にキャンプ経験の一般性自己効力への影響をみるために、実験群と対照群のキャンプ前後1ヶ月 (Pre と Post 2) における GSESC 得点の平均について t 検定を行った。その結果、表 4 に示す通り実験群と対照群の間には、Pre では有意差がなく同質であったが、Post 2 では実験群が有意 ($t=2.26$, $df=88$, $p<.05$) に高い。Pre を基準に Post 2 の得点を比較してみると、実験群は有意 ($t=5.33$, $df=47$, $p<.001$) に向上しているが、対照群では変化がみられない。また Pre vs Post 2 の変動量について実験群と対照群で t 検定を行った結果、有意差 ($t=2.53$, $df=88$, $p<.05$) が認められた。

3つの因子別による実験群と対照群の比較においては、Pre ではすべての因子で有意差がみられないが、Post 2 においては「失敗に対する不安」因子に有意差 ($t=2.11$, $df=88$, $p<.05$) が認められ、「能力の社会的位置づけ」因子に有意差傾向 ($t=1.78$, $df=88$, $p<.10$) がみられた。Pre vs Post 2 の変化を群別に比較した結果、実験群ではすべての因子で有意差がみられたが、対照群では有意差はみられなかった。そこで Pre vs Post 2 の変動量について実験群と対照群で比較してみると、「失敗に対する不安」因子にだけ有意差 ($t=3.61$, $df=88$, $p<.001$) が認められた。

したがって、キャンプ経験により児童の一般性自己効力が高まり、特に過去に行った自己の失敗経験にこだわり、暗い気持ちになる状態に代表される「失敗に対する不安」因子に関して著しい効果がみられた。

3. 一般性自己効力と学年差、性差、キャンプ経験の関係

まず第 1 に、Pre, Post 1, Post 2 の GSESC 得点をキャンプ参加者の学年差 (5年生29名:6年生19名)、性差 (男子32名:女子16名)、キャンプ経験の有無 (経験者33名:未経験者15名) ごとに比較した結果、表 5 に示すようにキャンプ経験の変数に、Pre, Post 1, Post 2 のいずれの測定段階においても有意差傾向または有意差が認められ、キャンプ経験の方が未経験者より高く認知していた。

次に、GSESC 得点の Pre を基準に Post 1, Post 2 の変化を学年差、性差、キャンプ経験の変数ごとに比較したところ、5年生と6年生、男女、キャンプの経験者と未経験者のすべての群で、Pre vs Post 1, Pre vs Post 2 に有意差が認められたが、変動量による比較ではいずれも有意に達するものではなかった。したがって、学年差、性差、キャンプ経験の違いが、一般性自己効力の向上に影響しているとはいえない。

さらに、因子別にみた Pre vs Post 1, Pre vs Post 2 の変化について検定した結果の t 値を学年差、性差、キャンプ経験の変数ごとに示したものが表 6 である。

学年差では「失敗に対する不安」で5年生・6年生ともに有意な向上を示しているが、「行動の積極性」(Pre vs Post 1: $t=3.05$, $df=28$, $p<.01$, Pre vs Post 2: $t=1.93$, $df=28$, $p<.10$) と「能力の社会的位置づけ」(Pre vs Post 2: $t=2.15$, $df=28$, $p<.05$) の因子では5年生にだけ有意差

表 5 学年別、性別、キャンプ歴による GSESC 得点の比較

変数	群	N	Pre		Post 1		Post 2		t1	t2
			M	SD	M	SD	M	SD		
学年差	5年生	29	47.62	8.74	51.66	10.61	51.45	9.35	3.25**	3.86***
	6年生	19	48.74	11.13	53.63	11.23	53.32	10.86		
			t = .39		t = .62		t = .63			
性差	男子	32	49.53	9.18	51.97	10.94	52.03	9.79	2.63*	3.88***
	女子	16	47.13	10.79	53.38	10.75	52.50	10.44		
			t = .47		t = .42		t = .15			
キャンプ経験	経験群	33	49.88	8.54	54.91	9.43	54.76	8.64	3.61***	4.85***
	未経験群	15	44.07	11.02	47.00	11.88	46.53	10.44		
			t = 1.99+		t = 2.48*		t = 2.86**			

t1=Pre vs Post 1

t2=Pre vs Post 2

+p<.10

*p<.05

**p<.01

***p<.001

表6 学年別、性別、キャンプ歴による因子別 t 値の比較

変数	群	N	失敗に対する不安		行動の積極性		能力の社会的位置づけ	
			t1	t2	t1	t2	t1	t2
学年差	5年生	29	1.89 ⁺	3.50 ^{**}	3.05 ^{**}	1.93 ⁺	1.24	2.15 [*]
	6年生	19	4.04 ^{***}	3.82 ^{***}	.92	1.25	.22	.55
性差	男子	32	2.05 [*]	3.57 ^{***}	2.43 [*]	2.53 [*]	.28	1.40
	女子	16	4.66 ^{***}	3.81 ^{**}	1.23	.68	1.58	1.61
キャンプ経験	経験群	33	3.96 ^{**}	5.62 ^{***}	1.67	1.41	1.12	1.67
	未経験群	15	.94	.72	2.95 [*]	2.94 [*]	.25	1.25

t1=Pre vs Post 1 t2=Pre vs Post 2 *p<.10 **p<.05 ***p<.001

がみられた。性差に関しては、学年差と同様に「失敗に対する不安」に男女とも有意な向上が認められたが、「行動の積極性」(Pre vs Post 1 : t=2.43, df=31, p<.05, Pre vs Post 2 : t=2.53, df=31, p<.05) は男子にだけ有意差が得られた。キャンプ経験については「失敗に対する不安」(Pre vs Post 1 : t=3.96, df=32, p<.01, Pre vs Post 2 : t=5.62, df=32, p<.001) で経験者に、「行動の積極性」(Pre vs Post 1 : t=2.95, df=14, p<.05, Pre vs Post 2 : t=2.94, df=14, p<.05) では未経験者に有意差が認められた。

考 察

坂野・東條¹⁶⁾が成人用に作成した「一般性セルフ・エフィカシー尺度」を児童用に修正し、小学校5・6年生を対象に調査した結果、高い信頼性が得られた。さらに、因子分析の結果も、GSES とほぼ一致したものだった。今後、「児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度」の妥当性について他の検査との関連を検討する必要があるが、児童にも十分に適用することのできる可能性を示唆している。

キャンプ経験による自己効力の変容については、一般性自己効力が高まり、その効果は1ヶ月は持続することが明らかになった。これは36人の非行少年とその対照群を対象に、キャンプに参加した非行少年の一般性自己効力が向上したというWright²⁴⁾の研究成果と一致している。また、キャンプによる自己概念の変容などが数多く報告されているが、それらと同様に本研究の結果からも、キャンプが自己の発達に効果があることが検証された。

自己効力は、1) 遂行行動の達成、2) 代理的経験、3) 言語的説得、4) 情動的喚起、の4つの

情報源に基づいて獲得されるとされている。

情動的喚起には、不安やストレスの影響が関係しており、不安の低下にともなって成功を予期する傾向が強まり、これが自己効力の向上に結びついたものと考えられる。一般性自己効力の因子別分析において、「失敗に対する不安」に著しい効果がみられた。小・中学生の状態不安が冒険キャンプ前に比べキャンプ後顕著に減少し、特性不安においてもキャンプ後漸次低下する傾向があることが報告されている⁶⁻⁹⁾。キャンプでの人間関係やキャンププログラムに対する不安が解消された結果、「失敗に対する不安」に効果があらわれ、これが一般性自己効力の向上に関与しているものと予測される。「失敗に対する不安」と状態・特性不安との関連をさらに詳細に検討するために、曾我²⁰⁾の児童用不安検査を実施してみる必要がある。

情動的喚起に関連して、遂行行動の達成をキャンププログラムの面から考察してみる。キャンププログラムに対するキャンパーの予見と結果から自己効力の変化を検討するために補足資料として「プログラム自己評価」を実施した。これはキャンプの6つの主要なプログラムについて、活動前後に班担当のカウンセラーの個人面接法による口頭質問に対し、キャンパーが「非常にうまくできる」から「まったくできない」の5段階で評定するものである。主要なプログラムは、テントサイト設営(1日目)、ASEと呼ばれる仲間づくりゲーム(2日目)、1泊2日の登山(3・4日目)、個人別自由活動(5日目)、自然物を利用したクラフト(6日目)、キャンプファイヤーのスタンツ(6日目)であった。

各々のプログラムの事前と事後を比較すると、自由活動を除いてすべてのプログラムが事前より

も事後の方が高かった。なかでも、テントサイト設営 ($t=2.48$, $df=47$, $p<.05$), 登山 ($t=2.61$, $df=47$, $p<.05$), そしてクラフト ($t=2.86$, $df=47$, $p<.01$) において有意差が認められた。

キャンプのメインプログラムは1泊2日の登山であったが、過去の研究^{6,7,9})からも登山前の不安が最も高く、今回の登山でも「生きて帰ってこれるか心配だった」「うまくやりとげられるかどうか不安だった」という内容が感想文の中に多くみられた。登山の途中、山中でテント泊した日は、夕方から激しい風と雨に見舞われ、夜中にテントを飛ばされたり、テントが破れたり、テントのポールが曲がったり、あるいはテントの床部分の水びたしになった。こうした状況の中でキャンパーは一晚を過ごし、全員が無事にキャンプに戻ってきた。遂行行動の達成については、成功体験をもった個人は、次の機会にもその状況を効果的に処理できるという予期を強める傾向があるとされており、これが一般性自己効力の向上に関係していると解釈されている。今回の登山も、キャンパーにとって、日常生活では到達できないほどの強い成功体験だったことは疑い余地がなく、登山の成功体験が遂行行動の達成の情報源になったものと推察される。キャンプの自己概念に関する研究でも、「達成動機」の要因に有意な向上が認められており^{6-8,22}), 遂行行動の達成と一致している。

したがって、主として遂行行動の達成と情動的喚起の2つの情報源が、キャンプ参加者の一般性自己効力の向上に影響を及ぼしたといえよう。

学年差、性差、キャンプ経験がキャンプ後の一般性自己効力の向上に影響があるとはいえないというのが、本研究の結果であった。

学年差に関し Rosenberg¹⁴⁾は、自己概念が最も顕著に発達する時期 (Critical Period of Self-Concept Change) を12~13歳の間としている。本研究の被験者の6年生のうち12歳の者が若干名含まれていたが、大部分は11歳であったため、5年生と6年生の間に差がみられなかったのかもしれない。しかし、因子別では5年生にだけ「行動の積極性」と「能力の社会的位置づけ」に有意な向上が認められた。発達段階からみた自己効力の Critical Period について、今後検討する必要がある。

性差については、キャンプ経験によって女子の自己概念の向上により大きな効果があることが多

くの研究によって報告されている^{6,7,9})。本研究の結果は有意なものではなかったが、Pre, Post 1, Post 2の各測定段階の GSESC 得点の平均値をみると、男子が49.53, 51.97, 52.03で女子が47.13, 53.38, 52.50で、キャンプ1ヶ月前には女子の方が低かったが、キャンプ直後・1ヶ月後には男女が逆転しており、女子の向上が優位であった。因子別分析では、「行動の積極性」に男子が有意な向上を示している。学年のところでも5年生に「行動の積極性」があらわれていたが、5年生の男子は23名で被験者48名中のほぼ半分を占めている。したがって、学年差によるものか、性差によるものかは明確ではない。さらに性差については、女子の割合が全体の3分の1で、性差を比較するには人数のアンバランスがある。今後男女同じ割合の被験者を対象に調査してみる必要がある。

キャンプ経験の有無は、同じ場所で毎年行っている幼少年キャンプ研究会主催のキャンプの参加者を経験者とした。ここで注目されることは、経験者はPre, Post 1, Post 2のいずれの測定段階においても未経験者より高い一般性自己効力を示したことである。本研究の結果からキャンプ経験によって一般性自己効力の向上が認められ、1ヶ月間維持されていたが、それより長期間にわたって持続する可能性があることを示唆しており、今後6ヶ月、1年後に再調査を行い、検討する必要があると思われる。

因子別分析では、「失敗に対する不安」で経験者に、「行動の積極性」では未経験者に有意差がみられた。Preにおいて「行動の積極性」と「能力の社会的位置づけ」では経験者が未経験者より有意に高い一般性自己効力を示したが、「失敗に対する不安」では経験者と未経験者はほとんど同じレベルであった。しかし「失敗に対する不安」について、Post 1では、有意傾向 ($t=1.92$, $df=46$, $p<.10$), Post 2では有意差 ($t=2.52$, $df=46$, $p<.05$) で、いずれも経験者に向上が認められた。すなわち、経験者は「行動の積極性」が高いことから個人のコンピタンスに対する評価が高く、行動遂行に費やす努力 (積極性) も強く、また「能力の社会的位置づけ」が高いことから社会的な場面において自己の能力を高く評価していると考えられる。したがって、経験者はキャンプでより積極的に、より社会的に認められるように行動した結果、未経験者よりも多くの、高いレベルの成功体験を獲得

し、「失敗に対する不安」の減少、逆にいえば自信につながったものと解釈される。

未経験者の「行動の積極性」については、初めてキャンプに参加したにも関わらず、経験者と同じようにキャンプ生活をし、キャンプを無事に遂行できたという認識が未経験者の「行動の積極性」の向上を促進したものと推測される。但し、未経験者の数を見ると、未経験者15人中10人を5年生男子が占めていることから、「行動の積極性」の向上がキャンプ経験による違いなのか、学年差、性差による違いなのかは明らかではない。しかしながら、小学校5年生の男子でキャンプ初参加者に「行動の積極性」因子に向上がみられたことは本研究の特徴的な結果といえる。

結 論

本研究の目的は、1) 児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度の適用性、2) キャンプ経験が参加児童の一般性自己効力に及ぼす効果、3) 一般性自己効力とキャンプ参加児童の学年差、性差、キャンプ経験の関係を明らかにすることであった。

小学校5・6年生48名を対象に、1泊2日の登山をメインプログラムとする7日間のキャンプを実施した。児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度を用いて分析した結果、次の結論を得た。

- 1) 児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度は高い信頼性をもっていて、児童に適用できる。
- 2) キャンプ経験は児童の一般性自己効力の向上に効果があり、特に「失敗に対する不安」因子に著しい効果が認められる。
- 3) 以前にキャンプ経験のある児童は、キャンプ経験のない児童に比べ、一般性自己効力が高い。
- 4) 小学校5年生男子でキャンプ初経験の児童は、「行動の積極性」因子に向上がみられる。

今後の課題として、1) 児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討、2) キャンプによる一般性自己効力の縦断的効果、3) キャンプの行動場面に合ったtask-specificな自己効力尺度の作成と一般性セルフ・エフィカシー尺度との関連、4) 一般性自己効力と性差の関係、5) 発達段階からみた自己効力のCritical Period、について研究を進める必要がある。

引 用 文 献

- 1) Bandura A (1977) : Toward unifying theory of behavioral change. *Psychological Review* 84 (2) : 191-215.
- 2) Brody EB, Hatfield BD and Spalding TW (1988) : Generalization of self-efficacy to a continuum of stressors upon mastery of a high-risk sports skills. *Journal of Sports & Exercise Psychology* 10 : 32-44.
- 3) Ewert A (1982) : *Outdoor Adventure and Self-Concept - A Research Analysis*. University Oregon.
- 4) Harmon P and Templin G (1980) : Conceptualizing experiential education. (Eds.) Meirer JF, Morash TW and Welton GE (In) *High Adventure Outdoor Pursuits*. Brighton Publishing Company, Utah, pp. 42-49.
- 5) Iida M (1975) : Adventure-oriented programs - a review of research. (Ed.) van der Smissen B *Research Camping and Environmental Education*. The Pennsylvania State University, pp. 219-241.
- 6) Iida M, Imura H and van der Smissen B (1986) : The impact of short-term adventure camp on self-concept and anxiety in Japanese early adolescents. *筑波大学体育科学系紀要* 9 : 91-101.
- 7) 飯田稔, 井村仁, 影山義光 (1988) : 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容. *筑波大学体育科学系紀要* 11 : 79-86.
- 8) 飯田稔, 坂本昭裕, 石川国広 (1990) : 登校拒否中学生に対する冒険キャンプの効果. *筑波大学体育科学系紀要* 13 : 81-90.
- 9) 井村仁 (1982) : アドベンチャー・プログラム経験が中・高校生の自己概念に及ぼす影響. *筑波大学体育科学系紀要* 5 : 59-70.
- 10) 岩田知郎 (1988) : 児童生徒の不安と自己概念 - ADVENTURE PROGRAM 経験を通して. *岡山大学教育学部大学院修士論文*.
- 11) 影山義光, 飯田稔 (1988) : 大学キャンプ女子参加者に対する因子分析を用いた自己概念の変容. *筑波大学体育科学系紀要* 11 : 139-144.
- 12) 影山義光 (1991) : 川崎市フロンティア・アドベンチャー・キャンプ事業の効果 - 参加者の自己概念と意識, 保護者のキャンプ効果に対する期待について. *中央大学保健体育研究所紀要* 9 : 45-59.
- 13) Klint KA (1990) : New direction for inquiry into self-concept and adventure experiences. (Eds.) Miles JC and Priest S (In) *Adventure Education*. Venture Publishing, Inc., Penn-

- sylvania, pp. 163-172.
- 14) Rosenberg M (1979) : *Concerning the Self*. Basic Books Inc, New York.
 - 15) Sachs JJ (1982) : The impact of a modified wilderness camping program on the social interaction and social expectations of behavior disordered adolescents. Doctoral dissertation, The Southern Illinois University.
 - 16) 坂野雄二, 東條光彦 (1986) : 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. *行動療法研究* 12(1) : 73-82.
 - 17) 坂野雄二 (1987) : セルフ・エフィカシーと行動変容. *日本教育心理学会第29回大会論文集*, pp. S37.
 - 18) 坂野雄二 (1989) : 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討. *早稲田大学人間科学部研究* 2(1) : 91-98.
 - 19) Shore A (1977) : *Outward Bound - A Reference Volume*. Outward Bound Inc., Greenwich, Connecticut.
 - 20) 曾我祥子 (1983) : 日本版 STAIC 標準化の研究. *心理学研究* 54(4) : 215-221.
 - 21) Swan MD (1987) : Resident outdoor education. (Ed.) Swan MD (In) *Tips and Tricks in Outdoor Education*. The Interstate Printers & Publishers, Inc., Illinois, pp. 245-254.
 - 22) 橘直隆, 小島哲, 寄金義紀, 飯田稔, 吉田章, 井村仁 (1990) : フロンティア・アドベンチャー経験が小中学生の自己概念と自然認識に及ぼす影響—静岡県主催事業を事例として. *筑波大学運動学研究* 7 : 61-68.
 - 23) van der Smissen B (1975) : The dynamics of research. (Ed.) van der Smissen (In) *Research Camping and Environmental Education*. The Pennsylvania State University, pp. 5-17.
 - 24) Wright AN (1982) : Therapeutic potential of Outward Bound process; an evaluation of a treatment program for juvenile delinquents. Doctoral dissertation, The Pennsylvania State University.